

八、隋唐と宋代（一）①

一、隋唐時代の思想

一・一、【儒教】

・唐の太宗 李世民^{りせいみん}は、六三〇年、[〔]^{1〕}に命じて『五経』を校定させる。

六三八年、[〔]^{2〕}

南北朝時代に盛んに作られた經典の講義録）を選定。

◎[〔]^{3〕}（『五経』の正しい解釈）

『周易』…王弼・韓康伯^{かんこうはく}の注

『尚書』…孔安国の注（伝）

『毛詩』…毛萇^{もうしょう}・毛亨^{もうこう}の注（伝）、鄭玄の箋。

『礼記』…鄭玄の注

『左伝』…杜預の注

これに孔穎達による[〔]^{4〕}（注釈の注釈）が加えられる。

↓儒教の經典には公式の統一解釈が存在することになる。

この国家教義にもとづき、[〔]^{5〕}の試験が行われる。

（試験によって官僚登用の資格を与える制度で、隋代に登場し、以後清末まで継続。）

一・二、【仏教】

・六四五年、[〔]^{6〕}

「がインドから帰国。仏教經典を翻訳（新訳）。

・[〔]^{7〕}

中国の伝統思想と共通する要素が多分にあり、中国人の感性に合致。

・[〔]^{8〕}

「…浄土三部經を根本經典とし、阿弥陀信仰、浄土信仰を説く。

浄土という死後の救済の地を約束し、凡夫こそが念仏を唱えるだけで救済されると説く。

唐代以降、中国の一般大衆の絶大な支持を得る。

一・三、【道教】

・唐の皇帝家が道教の開祖として神格化された老子（李耳^{りじ}）と同じ李姓であることから優遇され、厚い信仰を受ける。老子と皇帝家を結びつけた[〔]^{9〕}により、上清派が重用される。

また、『老子』『莊子』の注釈を著す者が数多く見られる。

一・四、【古文運動と儒教の再生】

儒教は『五経正義』の成立以来、長らく停滞を続ける。

中唐に入り、科挙官僚たちを中心に儒教改革の気運が起こる。

↓[〔]^{10〕}

「四六駢儷^{しりくべんれい}体」の美文を廃し、古代の質実な文に復帰せよ。

文学の枠を越えて、古代の聖人の道を取り戻すことを目的とする哲学と政治との運動に展開。

・[〔]^{11〕}

「…儒教を尊崇、仏教・道教を排斥。

『原道』…儒教の道は、堯↓舜↓禹↓殷の湯王↓周の文王・武王・周公↓孔子↓孟子と受け継が

れたと述べる。↓[〔]^{12〕}の思想。孟子を高く評価。

『原性』…性三品説に情三品説を加えてた人性論を唱える。弟子の李翱^{りこう}によって展開『復性書』。

韓愈・李翱の性・情の人性論や聖人可学論は、宋代の儒教に受け継がれる。

・[〔]^{13〕}

「…注釈の權威の束縛を脱し、合理的に古典を研究する批判主義的学風を受

け継ぐ。『非国語』を著す。超自然現象を信じず、天人相関思想を否定。

劉禹錫^{りゅうしやく}は、柳宗元の『天説』を発展させ、『天論』を著す。

◎

[〔]^{14〕}

この時代、儒仏道三教がおおむね平和裡に共存し、人的にも思想的にも実り多い交流が行われた。

[〔]^{15〕}

「…唐王朝が一貫して儒教を重視した証拠。

二、近世の始まり―唐から宋へ―

・七五五年、唐の玄宗時代に起こった安史の乱を境に衰えはじめ、九〇七年に滅亡。

五代という分裂時代を経て、九六〇年、[〔]^{16〕}

「（太祖）が宋を建国。

漢・唐とは違って領土が小さめで、外向きに拡大発展するよりも、国内において内向きに発展。

[〔]^{17〕}

「…唐から宋に至る間に起こった変動。

三国時代〜唐代：中世 貴族階級全盛の時代

宋代以降〜清代：近世 階級が流動化して一般市民が登場、活躍する時代。↓近代へ

・宋代文化の背景

- ①科挙制度の整備と文人官僚の活躍：「学問的实力」の社会へと変換。武官より文官を優遇。
- ②新興士大夫の登場：儒教の教養を身につけた人々が都市だけでなく農村、庶民層から出現。
- ③商業の発達：全国の物資が水路を通じて集まる。貨幣流通も増大。
- ④新しい書き言葉：「古文」という散文スタイルが定着。感情よりも分析と論理を重んじる。^{〔18〕}
「…韓愈・柳宗元・欧阳脩・曾鞏・王安石・蘇洵・蘇軾・蘇轍」
- ⑤印刷と情報革命：四大發明（紙・火薬・羅針盤・印刷技術）。書物が大量に出版される。
- ⑥書院と民間教育の発展：私立学校・学塾である「書院」が発達。
これらはすべて清末すなわち二十世紀初頭に至るまで継承され、漢民族の核となる伝統文化をかたちづくった。また、東アジア世界にも波及し、文化に強い影響を及ぼした。

三、儒教の復興

・新興の士大夫によって儒教が復興。

唐代：「注疏」の学、「五經正義」という国家的統一解釈も作られる。↓^{〔19〕}「の学。

宋代：「^{〔20〕}」の学（義理とは道理、真理の意味）が起こり、儒教が再浮上。

◎^{〔21〕}「の選出：『論語』『孟子』『大学』『中庸』」

・「行動する儒者」：宋代儒教の特色の一つは、その実践性。

三一、^{〔22〕}」

宋代思想が新しい様相を帯びるのは建国後しばらく後、仁宗の慶暦時代から。この時期の代表的人物。

「^{〔23〕}」：政治改革。

↓^{〔24〕}「先憂後楽」を説き、社会的責任とエリートとしての自負は当時の士人に強い印象を残す。

「^{〔24〕}経義齋」と「治事齋」という学舎を作って学生を教育。
「^{〔24〕}経義（^{〔24〕}経学）と「^{〔24〕}治事」（政事や国防、水利、暦算などの実用的学問）

↓^{〔25〕}儒教の研究のみならず、それを政務上に実践するという方針のもと、教育界に新風を吹き込む。

「^{〔25〕}」：「夷狄を攘いて中国を救う」という民族主義を鼓吹。

周囲の異民族国家に圧迫されていた宋代の思想的・一基調。↓日本の幕末の尊王攘夷思想へ。

三二、^{〔26〕}」

「^{〔26〕}易童子問」では従来孔子の作とされていた十翼（『易』に付される十篇の解説）を孔子の作ではないとし、『詩本義』では注疏の誤りを指摘する。

↓^{〔27〕}「…自由な立場で經典を研究しようとするもので、これまで見られなかった態度。

『新唐書』で漢代以来の「^{〔28〕}」を批判（天人相関説を載せない合理性）。

金石文研究の先駆者、古文運動の指導者。

三三、^{〔29〕}」

「^{〔29〕}」：欧陽脩によって登用。

「^{〔30〕}」：儒教の理念を実践し、社会を改革しようとする。

個人的には『孟子』、政治的には經書の『周礼』による。

『周官新義』：鄭玄らの注疏の解釈を離れた、『周礼』の政治性を最も發揮した注。

「^{〔31〕}三經新義」の一つとして科挙試験の標準的解釈としても用いられる。

それまで注目されていなかった「^{〔31〕}」の地位が飛躍的に向上。

・統制経済による国庫の増収と文人官僚の思想統一を目指す。

国家権力をバックにした強引な手法が士大夫たちの反感をかい、当初これに賛同していた人々が反対にまわった結果、「新法党」対「旧法党」という政治競争が起こる。

（旧法党：司馬光、蘇軾・蘇轍兄弟ら。性急な国家統制策に反対、穏健で着実な道を選ぶ。）

↓^{〔32〕}「^{〔32〕}」：新法の官僚として活躍。

『夢溪筆談』：医薬・天文暦法・地質・地理・物理化学・建築土木に関する記述。

三四、^{〔33〕}」

『資治通鑑』：編年体の歴史書。

『書儀』：冠婚葬祭儀礼のマニュアル。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 |